

日本の若年者甲状腺癌乳頭癌の臨床像と臨床経過について

—文献の紹介—

神奈川県予防医学協会

(横浜市立大学客員教授) 吉田 明

2012年以降に発表された日本における若年者甲状腺癌の多数例を取り扱った3報告について

① Y.Enomoto, K.Enomoto, S.Uchino et al.

Clinical features, treatment, and long-term outcome of papillary thyroid cancer in children and adolescents without radiation exposure . World J Surg. 36:1241-1246, 2012

対象：1961~2005年の間に野口病院で初回治療を受けた20歳未満の乳頭癌142例（同期間の全症例の1.5%に相当）

男：17、女：125. 平均年齢 16.3±2.7歳、追跡期間 21.8±12.0年

初診時の所見

	Children (<16歳) n=40	Adolescents (≥16歳) n=102
腫瘍径 (mm) T	25.0 ± 5.0	18.0 ± 1.7
頸部 LN 転移 N1	17 (42.5%)	16 (15.7%)
遠隔転移 M1	3 (7.5%)	0 (0%)
被膜外浸潤 E X	22 (55%)	41 (40.2%)

手術

手術合併症（全摘を行ったものに多い）

片葉切除 45例 LN郭清なし 50例

永久性感官機能低下 1例 (0.7%)

亜全摘 85例 CND 20例、MND 72例

永久性反回神経麻痺 4例 (2.9%)

全摘 12例

RAIのablationを受けたものはいない。

再発 28/139例 (20.1%) (LN 25例、肺 9例、残存甲状腺 5例、縦隔 LN 1例、その他 3例)

LNの多くは再切除、遠隔転移はRI治療

原病死 3例 (2.1%) 他病死 5例

DFS (無再発生存率) 74.1%、CSS (原病死率) 97.5%

予後に関する検討

頸部 LN 転移のあるもの、腫瘍径の大きいもの、16歳未満のもの、被膜外浸潤のあるもの、甲状腺癌の家族歴のある者は有意にDFSが悪かった。(再発をきたし易い因子)

初診時 頸部 LN 転移のあるもの、遠隔転移のあるものは原病死と有意に関連していた。

上記の危険因子を伴わない若年者の甲状腺癌は片葉切除などで十分である。

② Y. Ito, M. Kihara, Y. Tamura et al

Prognosis and Prognostic factors of papillary thyroid carcinoma in patients under 20 years.
Endocrine J. 59:539-545, 2012.

対象 1987-2007年に隈病院で初回治療を受けた20歳未満の乳頭癌110例
追跡期間 149ヶ月(17-296)

男性:12、女性98 平均年齢17歳(7-19歳)

腫瘍径 4cm未満75%, 4cm以上25%

頸部LN転移 N あり 42%

遠隔転移 M あり 8例7%

被膜外浸潤 あり 8%

手術

非全摘 51例 CND(中心部の郭清) 104例、MND(側頸部までの郭清) 91例

全摘 59例

RAI ablation なし

M1→RI治療(8例)

再発

LN再発 16/102例 (15.7%)

遠隔再発 6/102例 (5.9%)

RFS (無再発生存率)

術後経過年数	LN-RFS (%)	DRFS(%)
5年	89	99
10年	84	95
20年	80	89

LN-RFSには16歳以下と術前大きなLN転移を有するものが有意に多かった。

DRFSには明らかな被膜外浸潤と術前大きなLN転移を有するものが有意に多かった。

原病死 2/110例(1.8%)

1例は15歳の男児 手術時M0であったが 肺転移と骨転移を来し187ヶ月目に死亡。

もう1例は16歳の男子 M1症例であり RIによる治療を行ったにも拘わらず28ヶ月で死亡。

若年者甲状腺癌では原病死は少ないが、aggressiveな性格を有し、再発は多い。

③ K Sugino, M. Nagahama, W. Kitagawa et al

Papillary thyroid carcinoma in children and adolescents: Long-term follow-up and clinical characteristics. World J Surg 39:2259-2265, 2015

対象 1979-2012年に伊藤病院で初回治療を受けた20歳以下の乳頭癌227例

追跡期間 155ヶ月(15-422)

男性:26、女性201 平均年齢18歳(7-20歳)

初診時の所見

	Children (<16歳) n=52	Adolescents (≥16歳) n=175
腫瘍径4cm以下のもの	36(69.3%)	138(78.9%)
DSV(びまん性硬化型亜型)	6(11.5%)	7(4.0%)
頸部LN転移 N1	20(38.5%)	44(25.1%)
遠隔転移 M1	10(19.3%)	10(5.7%)
被膜外浸潤 EX	8(15.4%)	12(6.9%)

M1は16歳未満に多い

手術した年代により2分すると2000年以降に手術したものではTが小さいもの、遠隔転移のないもの、被膜外浸潤のないものが多くなっていた。しかし頸部LN転移のあるものは逆に増加していた。

手術 非全摘 158例
全摘 69例

頸部郭清 210例(92.5%)
治療的郭清 63例、予防的郭清 147例

再発 45例(21.7%) → LN 36例、残存甲状腺7例、遠隔再発 12例

遠隔転移は全部で32例(14.1%) → M1 20例 遠隔転移、再発 12例

この32例中29例はRI治療、2例は拒否、1例は治療待ち

RI治療の効果 CR(完全寛解)4例、PR(部分的寛解)16例、SD(不変)7例、PD(進行性)2例

DFS 10年-84.1%、20年-69.9%、30年-63.2%

DFSに関連する因子は術前頸部LN転移と被膜外浸潤であった。

原病死 2例(0.9%)

17歳 女子 術後 23歳時肺転移で

9歳 男児 術後 31歳時肺転移・呼吸不全で

DFSのリスクを持たない症例には甲状腺全摘は必要でなく葉切除などで十分であると考えられた。

US解像度が近年非常に良くなり、術前に頸部LN転移や被膜外浸潤の診断が正確に行える様になった。